

---

# 鳥の家

両角忘夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥の家

### 【Nコード】

N1571A

### 【作者名】

両角忘夜

### 【あらすじ】

妻や娘と別居した男は、一軒のくたびれた中古住宅を買って住む。中学生カップルとの奇妙な出会い。娘との会話。死んだ鳥。シュールな建築系小説。

## 第一話：くたびれた家は、まるで男の心のようにだった

夏に、格安で中古住宅を購入した。柱の傾いた、木造平屋建。瓦には蔦が生え、外壁には無数の亀裂が走る。

男はホームセンターで、脚立とコーキング材を買い、汗をかきながら亀裂の一本一本を塗り潰した。それがかえって外壁の醜さを実際立たせた。

不気味な染みの浮いた天井の隙間から、水が漏ってくる。

秋晴れの続いたある日、男は決心して屋根に上り、瓦を外しながら丁寧に蔦を抜いた。土を落としてブルーシートで覆ったところで、その日の作業は終わった。次の日は早起きし、あらわになった野地板に防水紙を貼り直し、瓦を並べて固定した。

見回すと、周りの家はすべて男の家より高く、洒落た外装をしていた。それでも、くたびれた家は男の心のようにだったから、羨ましいとは思わない。

暗い道の向こうに沈んでいく憂鬱な光を眺める。男は自分の作業に満足して屋根を下りた。

一週間後、17番目の台風が列島を舐め、天井やサッシの隙間から、以前に増して雨漏りがするようになった。変色した畳の上に、プラスチックの容器を並べて雨を受ける。

隙間風の冬を越し、春を迎える頃、男の家に、中学生のアキオとレイコが遊びにくるようになった。

始め二人は、男の家を、お化け屋敷のようなものと思っていた。また、大人や同級生に隠れて愛し合う隠れ家にしようとも考えていた。ところが誰も住んでいないと思って侵入した家のなかで男と出くわし、二人は驚き頭を下げた。

しかし、男に怒る気持ちはなく、今にも逃げそうな二人を部屋に招いた。男は台所に立ち、お茶を入れてきたが、二人は飲まなかった。

それから、二人は数日置きに遊びにくるようになった。お茶は近所のコンビニで、ペットボトルのものを買ってくる。男の分も。

三人でお茶を飲みながら会話をした。男は中学生のテンポについていけないときもあったが、静かに相槌を打った。

打ち解けてくるとアキオは、唐突に、驚かせるようなことを言う。

「おじさん、俺の兄貴な、東京で右翼やってるんで」

別の日には、「プロレスラーになるには、何が何でも体力や」など。

レイコが、「あたし、ここで犬飼いたいな」と言った。

レイコの自宅は線路向こうのマンションで、両親は潔癖症で動物嫌いだから、犬はもちろん、小鳥やハムスターも飼えない。

男は動物が嫌いじゃなかったが、好きでもなかったから、飼いたいとは思わなかった。

そういえば別居した妻や娘も、一度も動物が欲しいと言ったことはない。テレビがあり、パソコンがあり、携帯電話があつて個室があつたから、それでペットはいらなかったのだろう。

「犬なら兄貴が、殺したことあるで」。アキオが言う。レイコが怒って、「何それ。ひどすぎる。自分が死ねばいいのに」

三人はそれから黙ってお茶を飲んだが、アキオが話題を変え、「しかしこの家、ボロいよな」と言った。「放火魔いたら、燃やされちゃうで」

男は言葉を返さなかった。レイコが立ち上がり、「帰るよ」と言うて外に出た。アキオが追い掛ける。

二人が帰ると男は片付け、みすばらしい壁や畳を、指で押したり撫でたりしてみた。壁の裏が湿気で、黴や虫の巣になっているだろう様子が頭に浮かんた。

中学生たちは次に来たとき、もう犬の話はしなかった。

アキオが、ミニスカートであぐらをかくレイコを横目で見、「おじさん、こいつのパンツ見たくないか」と言った。

男は立ち上がり、平手でアキオの頭を打った。

それで沈黙があり、次はサッカーの話題になった。

男はスポーツには興味がない。レイコも、お気に入りのかわいい選手の話題以外は話さず、アキオだけが興奮した大声で話していた。

アキオは、敵チームや嫌いな選手を目茶苦茶にけなす。レイコはかつこいい選手を、本当の恋人のように褒めちぎった。

男は突然思い立ち、アキオの話を遮って訊いた。「君たち、家づくりに興味はあるかい」

アキオは少しポカンとしてから、「どうでもいいやん」と言った。

「お城なんか好きだろう」

「俺、ガキじゃないっすから」

レイコに、「君はどう。素敵な家に住みたいよね。どうやってあれが作られるか、知ってるかい」

「あたしの家は綺麗よ」。つまらなそうに答える。「ここよりずっと綺麗だな」

「そう。こいつの家、すげえマンションや」

男は、何度か外から見たことがあるレイコのマンションを思い浮かべ、外壁タイルの浮き具合や、屋上に上がって防水の仕上げを確認したい、と思った。

「おじさんは、建物の診断士だったんだ」。男は言った。

それからまた沈黙があり、テレビドラマの話題になった。

## 第二話：男と、女と、死んだ鳥

男はある日思い立って、電車に乗った。中学生が遊びに来てもいいように、玄関の鍵は開けたまま出掛けた。行き先は、むかし妻や娘と住んでいた町。

懐かしい改札を抜け、坂道を上る。厚い擁壁に囲まれた金持ちそうな家の隣に、その家はあった。

深いグリーンの洋瓦の家。築12年目。窓周りの亀裂がそろそろ目立ってきた。塗り替え時期だ、と男は思う。

妻は忙しく、家には関心が薄いから、本当なら自分が手配しなければならぬところだ。

ベルを押すが返答はない。

あとで外壁を塗り替えるか、せめて1ミリ以上の亀裂は埋めるよう手紙を出すぞう。

もう少し家の状態を見たかったが、元々自分も住んでいた場所とはいえ、無断で敷地に入るのは憚られた。

来たばかりの坂道を下る。すると途中に、赤いランドセルの少女がしゃがんでいた。

「カナエ」

男が声をかけると、娘は物憂げに顔を上げた。

「お父さん」

「何してるんだ、お前」

「お父さんこそ」

娘は両手で、何か、大切そうに抱えていた。

「雀が怪我して溝に落ちてたから助けたの」  
見ると、もう死んでいる。

「まだ温かいよ」とカナエは言う。

男も手を伸ばして触れてみた。鳥の形のカタマリ。娘は自分の手の温もりを、雀の温かさと勘違いしている。

「お前、小鳥が欲しかったのか」

カナエは首を横に振り、「欲しいとかじゃない」

それから二人は公園まで歩いた。

桜の木の根元に穴を掘り、カタマリを埋めた。鴉が上から見下ろしている。

「お迎えだ」。カナエが言った。

「じゃ、お父さん、もう帰るからな」。

男は公園を出て歩き出し、後ろを娘がついてくる。アスファルトに、電柱や塀の長い影がいくつも横たわっていた。

振り向かないまま男が、「母さんは、相変わらず忙しいのか」と尋ねると、カナエは少し考えてから、「わからない」と答える。

「わからないことはないだろう」

カナエは男に、「だけとお父さんは、もう働かないの」と尋ねる。

「わからない」

「なんだ。お父さんもわからないんだ」

「父さんは心の病気なんだ」

「ココロノビヨウキって？」

「わからないか」

「わからないよ」

切符を買い、改札前で向き合う。

「お母さんに、家の手入れだけはちゃんとするように言っというてほしい」

「お父さんこそ、ちゃんとしなさいよ。お母さんが、もうお金渡さないって言ってたよ」

「そうか」

「そうだよ」

手を振って別れた。

くたびれた家に帰る。誰も居ず、空のペットボトルが転がっていた。

女が改札を出る。坂道を上り、帰宅した。

居間でテレビを見ていた娘が、「お帰りなさい」と声をかける。女は返事の代わりに溜息をつき、ソファに座って足を伸ばした。

「ココア、入れてちょうだい」

「うん」

「あと、宿題やるときなさいね」

「あのね、お父さんがさ」

「お父さん？」

女は怪しむ顔で娘を見た。

「家をちゃんと手入れしなさいって」

「来たの」

「うん。学校帰りに会ったよ」

「そう」

女はまた一つ、溜息をついた。

「あの人、相変わらずね」

「ココロノビヨウキ、って言ってた」

「そうね」

女は娘からマグカップを受け取り、ココアを啜った。

「それ以外、何か言ってた？」

「わからない、と言ってました」

「わからない？」

「あたしも、わからないと答えたよ」

「それじゃ、会話になってないじゃない」

「そうだね」

カナエは二階に上がり、女は一階でパソコンを叩いた。文章につまると写真集や雑誌をめくり、ぼんやりしてからまたキーボードを打つ。

「上手くいかないわ」

溜息をつく。

「とても疲れている」  
独り言を言う。

### 第三話：子供たちに

くたびれた家に二度目の夏が過ぎ、秋が深まる。  
アキオが欠伸と共に、「なんか、つまんねえや。この頃」とこぼした。

レイコはだるそうに、「つまんないけど、あたしは幸せ」と言う。  
「あつ、そ。俺はもう、ここには来ねえっす」。

アキオはそう言って立ち上がるが、男やレイコの反応が薄いのを見て座り直す。

「あたしはここにいるのがラク。不満ないし」

「けど、このままだと、つまらんやん」

「何がしたいの」。男が訊くと、「俺、働きたいかもしれんです」。  
少年は言った。

「あたしと高校行かんの？」

「悪いけど、就職する」

「何がしたいの」

「俺、おじさんみたいに、ダラダラした大人にならんで」。少年の頬が赤く染まる。

「何がしたいの」

「何でもいいやんツ」。少年は立ち上がり、男に背を向けた。

「もういい。アンタ帰れ」。少女が言う。

「お前も帰れよツ」。少年が叫ぶ。

男はそれを静かに見ていた。

アキオは怒って家を出た。少女はしばらくポカンとしていたが、小さな声で、「あいつキモいわ。絶交する」と呟いた。

男は、アキオが自分に吐いた言葉を思った。ダラダラした大人。  
ダラダラした……

僕たちは、お互いにすっかり飽きてしまった。この少女も、やがてこの場所を嫌いになるか、自分が彼女を嫌いになって追い出すだ

ろっ。

友達のような、ただ優しい、頷くだけの大人では駄目だ。

子供たちは、僕から何かを感じたいと思っている。でも、何を与えられるだろう。ダラダラした大人の自分に。ダラダラした……

それは家だ。男は思った。

ぐったりした顔で呆けていた少女に、男は言った。「外壁を塗り直そうと思う」

「あ、うん」

「アキオ君を、もう一度連れてきて欲しい」  
「いいけど」

レイコは、不思議そうに笑った。

「一緒にやるんだ」。男は言った。

翌日、学校が終わってやって来た二人に、作業手順を説明する。まず足場を組む。傷んだ外壁を剥がす。下地の補修。マスキングをして、鏝で壁土を塗る。

三人でホームセンターに出向き、材料や工具を購入した。壁土は漆喰にする。レイコの意見で、顔料を混ぜ、淡いオレンジ色にすることに決めた。

足場材は、電話で昔の仲間に事情を話し、借りることにした。明後日、トラックで運んできてくれる。

足場を組む日、アキオが仲間を三人連れてきたので、手伝ってもらったことにした。足場材を持ってきてくれた工務店経営のセキネも、「今日は本業が休みだから」と、親方気取りで中学生たちに指示を飛ばす。

賑やかに作業していると、隣宅の夫婦が怒鳴り込んできた。

「何の騒ぎだ。工事するなら、近隣に説明してからじゃないと困るだろ」

そこで一旦作業を中止し、子供たちを連れて挨拶に回った。中学生と一緒に作業するという話を聞き、怒る人もいたが、面白がる人や、励ましてくれる人もいた。

翌日になると、興味を覚えた近所住民が見学に来、現場は混乱した。全員の手袋やヘルメットを買い揃えたり、食事を用意してくれる人まで現れた。

アキオもレイコも楽しそうだった。手や顔を汚しながら、夢中になって汗を流した。

教員や警察も、様子を見に訪れた。

二週間後、淡いオレンジ色の家が完成した。

改装祝いに食事や飲み物を揃え、みんなを屋内に招くと、荒れた天井や内壁を見てほとんどの人が驚き、「今度は室内のリフォームをしよう」と言われたりした。

改装祝いにはアキオの両親も参加したが、レイコの家族は来なかった。「でもウチの親、あたしが元気になったって、喜んでたし」「俺、やっぱ大工か左官屋になるっす」。アキオが言った。

男は満足した。

#### 第四話：鳥の家

娘から電話があつた。手のなかで死んだ雀の感触を思い出し、胸の奥がワサワサするという。それから他愛のない話を少しした。

「お母さんは相変わらずか」。男は訊いた。

「うん」

「家の話は伝えたか」

「うん」

「ちゃんとやってるか」

「ココアを飲んできた」

「ココアを」

「そう。ココア」

男は、「外壁の亀裂を放置しておく、水が入って傷むからね」と念を押した。

「伝えておきます」

男は少し考えてから言った。「カナエ、死んだ小鳥はなぜ寂しいのだろうね」

「寂しい？」

「うん。それはきっと、家がないからじゃないかな」

「鳥に家なんかいるの」

「家はみんなに必要なんだ」

「死んでからも？」

「あの世でも必要だ」

カナエは少し笑い、電話を切った。

帰宅した母に、父との話を告げると、「あの人、相変わらずね」と溜息をついた。

冬になり、雪が降った。カナエは冬休みの間、死んだ雀のために建ててあげる家を想像しながら過ごした。ノートに家の絵を描いてみる。何頁も。色えんぴつで色を塗った。赤い屋根や青い屋根。や

がて一冊を書き終え、それを父に見せたいと思った。

雪が溶けると、娘は淡いオレンジ色の家を訪ねた。部屋には数人の中学生がいて、父と何かを話していた。

「はじめまして」。彼らに挨拶をし、それからノートを渡して見せると、父はそれを見ながら言った。

「柱が弱いな」

「柱？」

「そう。これでは地震で倒れてしまうから、筋交いを入れて補強しなきゃ駄目だ」

「死んだ世界で地震なんかくるの」

「台風もな」

カナエは、少し考えてから言った。「お父さん、やっぱり違うよ。家が大切な鳥なんて、寂しいよ」

中学生の一人が、「変な話をしているや」と言っ、笑った。

カナエはそれには応えず、喋り続けた。

「鳥には、ときどき休める枝があればいい。それからいろんな場所に行っ、好きなだけ鳴いて、いなくなればいい」

「それじゃ、みんなに忘れられてしまうで」。中学生が言った。

カナエは黙って家を出た。

角を曲がって走り出す。疲れて、道端にしゃがみ込んだ。心臓が痛んだが、胸の奥のワサワサした違和感はもうない。言葉で雀を自由にした。

春が来て、休みの日にカナエが公園のベンチに座っていたら、どこかで見たことのある少女が歩いてきて、隣に座った。

「ノート、忘れてったね」。

レイコが言った。

「あんたのパパ、面白い人かも」

「そうですか」

「あのさ、あたしは鳥より犬が好きだな」

「どうして？」

「だって鳥は小さくて、つまないじゃん。あたしはでっかい、フカフカの犬が好き」

「フカフカの犬、飼ってるんですか」

「ううん。あたし、犬、飼ったことない。ただ好きと思うだけ」

「そうですか」

「そうなの」

カナエは言った。「あたしたち、仲良くなれませんか。きっと」

レイコは顔を遠くに向け、「そうかなあ」と呟いた。

それから二人はしばらくの間、テレビゲームやアイドルの話をし、手を振って別れた。

夏になって、男からカナエ宛に郵便が届いた。開封すると一冊のノートが出てきた。

どの頁にも、紙いっばいに家の絵が描いてある。カナエが描いた貧弱な鳥の家に、色ペンを使って増築されていた。

三階建や四階建。バルコニーの手摺りがアルヌーボー調なもの。一階がガレージになったもの。屋上が庭園になっているもの。

こんな家に鳥は住まない。カナエは思った。

女がマグカップでココアを啜りながら覗き込み、「相変わらずだわ」と呟き、溜息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1571a/>

---

鳥の家

2010年10月8日15時59分発行